

度肝を抜かれた東日本大震災

仙台市消防局警防部警防課

主幹 大久保俊幸

はじめに

今回の東日本大震災により、犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りいたします。

また、この度の震災においては、北海道から沖縄まで全国から緊急消防援助隊がいち早く応援に駆けつけていただきました。被災地としまして本当に心強く、皆様のお力添えに感謝し、この場をお借りしまして御礼を申し上げる次第です。本当にありがとうございます。

3月11日午後、これまで経験したことのない大地震が発生しました。昭和53年の宮城県沖地震より強く長く、壁からは薄い煙のような塵が降り注ぎ、議会開会中で上司の随行をして議事堂にいた私は、建物が崩れてしまうのではないかと身の危険を強く感じました。揺れが収まった後、消防局長をはじめ私どもは、議事堂から素早く車に乗り込み、サイレン吹鳴で消防局庁舎に戻りました。既に警防本部は立ち上がっており、津波警戒にヘリが出場しているのを確認し、市内の火災状況は思っていたほどでもないことにホッとしました。しかし、屋上のアンテナが倒壊していてヘリテレの受信ができず、無線による状況把握に努めることしかできませんでした。救急とエレベーター閉じ込めによる救助等が主な119番への要請で、あの大きな揺れのわりには火災の発生が少なく、徐々に落ち着きを取り戻している自分達が居たことを覚えています。

そんな時、災害対策本部を経由した県警ヘリが津波の状況を捉えました。まさに映画のワンシーンを観ているような映像が映し出されており、被害の少なさを祈ることしかできない状況でした。我々が今まで備えてきたものはことごとく打ち負かされ、情けも何も無い、あまりにも惨い仕打ちに自然と闘う無力さを痛感させられたのです。この時点からしばらく眠ることもできない、私にとって大津波への手探りの警防本部運営に入りました。

津波被災地となった宮城野、若林消防署の区域に、管内で比較的被害が少ない消防署から応援隊を移動配置し、津波で被災した人々の救出救助活動、緊急消防援助隊の応援要請に伴う県調整本部の対応、受援の調整、石油コンビナート地区火災、浸水域の中野小学校、荒浜小学校へ避難した住民の救出対応等々、時間がアツという間に過ぎてしまいました。そうした矢先、日がかろうとしていた深夜、中野小学校長から防災行政無線で「助けてくれ」の一報が、西側から風にあおられた煙と火の粉で避難した人々が焼け死んでしまうと言う。「携帯電話も繋がらず、やっと話できた。みんなを救って下さい。」との声に、消防局長はじめ警防本部幹部は決断を迫られた。地上からは瓦礫と泥で消防車両は進入できず、道路すら無い状況で津波の危険もある。停電で真っ暗な中、地上からのアタックは断念せざるを得ず、残る手段はヘリによる空中消火しかないと判断した。被災した消防へ

リポートから自衛隊基地に活動拠点を移した航空隊に活動の可否を問い合わせる。本来、夜間の空中消火は行わないことが鉄則であるが、五百数十名が校舎屋上に避難して救助を待っており、何らかの行動に移さずにはいられない状況であった。「やってみる」と、これに応じてくれた航空隊は、夜間の空中消火を4回実施し火勢の拡大を防いだ。まさに消防魂で住民の命を救った活動となった。

巨大津波発生翌日、早朝から地上と空から一丸となった救出活動が開始され、地上では重機で瓦礫と泥を掻き分けて進入路をつくる道路啓開を行い、空からは、仙台へり、札幌へり、東消へり、自衛隊へりが、津波浸水域の家屋や避難所となった小学校から被災者を次々と救出した。道路啓開後、避難場所となった中野小学校から市営バスのピストン輸送も功を奏し、夕方までに荒浜小学校を含め2つの小学校へ避難した住民全員の救出を完了することができた。寒さの中、避難場所でさらに一夜を明かすという最悪の事態は避けられ、関係機関が総力を挙げて成し遂げた救出は誇れるものがあると思う。

その後も次々と発生する想定外の災害に、消防局内で毎日2回以上の警防本部災害対応会議を行い、更には発災後の2日後の13日から、局長命により各署の署長を招集しての部隊運用特別会議を開き、消防局としての統一した活動方針を示し、情報の共有を図った。その後、これを毎日同じ時刻に開催することとし、それから約2ヶ月間続くこととなった。

今回の東日本大震災に起因する人的被害及び火災の発生については、津波による被害を除くと、前回、昭和53年に発生した宮城県沖地震の教訓が大いに生かされ、被害の軽減が図られた。前回の地震では、ブロック塀の倒壊で多くの死傷者が出たが、ブロック塀の解消、生垣の推奨、自動販売機の転倒防止対策、建築基準の改正や家具の転倒防止等を含め、多くの防災訓練と防災指導の結果として、建物倒壊や火災による死者の発生がなかったことを考えると、それまでの取組の成果が表れたものと感じている。

今回の震災においては、本市消防発足以来、誰も経験したことのない巨大津波の救助検索活動や他機関との調整など、苦しんだ事、改善すべきことが多くあったが、これらを後輩に語り継ぎ、この貴重な体験を将来の一助にしてもらいたいと考えている。

まず、燃料の確保については、石油コンビナートの被災、輸送ルート途絶、タンクローリー自体の被災などにより、地元の消防車両だけでなく、各県から応援に駆けつけてくれた緊急消防援助隊車両、現場活動で使用する重機等の稼動に大きな支障となった。この大震災の教訓から、国においても備蓄体制の構築に取り組んでいくこととは思うが、各消防本部においても、庁舎、車両の運用に支障をきたさない備えが必要であり、元売業者や震災に対応したスタンドとの協定を図ることや、緊急燃料庫の整備などに取り組んでいく必要がある。また、食料の確保も当然必要で、備蓄食料や救援物資は被災者優先となることから、職員各自が備蓄食料を最低3日分程度は準備する必要があることも教えられた。

次に資機材の準備だが、津波被災地での人命検索と行方不明者の捜索活動は、想定外のことであっただけに対応に苦慮した。津波災害を想定した場合には、瓦礫を排除する重機はもちろん、人海戦術に必要な検索棒、胴長、長手袋、救命胴衣、防寒具、メガネ、マス

ク、その他ボート、水上バイクなど、考えられるさまざまな資機材の備蓄等を早期に対処する必要がある。また、市災害対策本部各班との調整・連携は、通信回線の途絶等により困難となるが、こうした業務は市全体としての災害対応に最も重要なもののひとつとなる。こうした中、迅速に災害対応に当たる消防班とはどうしても温度差が生じ、市民が今何を望んでいるのか、そしてスピーディーな対応が取れているかを相互に理解しあいながらというより、理解させる努力が必要になってくる。

また、現場をあずかる消防として最も連携が必要となるのは、災害対応に従事する各機関との調整で、自衛隊、警察、海上保安庁、緊急消防援助隊も含め、消防としての方針、先導、収束までのビジョン等をはっきり示し伝えなければならない。人命救助のイニシアティブをとるのは消防なのだという気構えが大事だとも感じた。被災者の救出のためには、あらゆる手段を模索し、必要と思われることは何でもやってみる。ただし、不適と判断されたものは早急に修正をかける。そんな気構えが災害対応にスピード感を持たせ、組織を強固にしていくものと思った。

最後に現場対応で、亡くなられた方々の捜索や、遺体の収容に長く関わった隊員の心のケアも課題である。辛く、寒く、厳しい東北の終冬時の冷たい泥水につかりながらの捜索活動となり、さらに隊員自身の家族の安否が確認できないままの状態にあったため、精神的ストレスも限界であったのに誰一人「帰りたい」などと、口に出す職員がいないが故に、災害対応の最中から、職員のメンタルケアと惨事ストレスに対するフォローが必要となります。

今回の震災では、燃料の不足やライフラインの途絶、食料等の物資調達が日々困難となっていくなかで、活動は長期間に及んだが、使命感に燃え、最後まであきらめる事無く、救助・捜索活動に当たった仙台市消防はしっかりとその職責を果たし得ることができたのではないかと私なりに思っています。

おわりに

この度、全国から駆けつけて下さった皆様のお力添えは決して忘れません！こんなに長期間にわたり応援下さった皆さんの姿が、どれだけ市民の力となり励ましとなったことか。そして多くの皆様から物心両面にわたるご支援をいただき、本当にありがとうございました。皆様のご尽力に改めて深く感謝申し上げます。